思い草
國學院大學人間開発学部教育実践総合センターだより
第27号
平成30（2018）年11月21日　発行

あの世のはなし

人間開発学部教授　太田（おおた）　直之（なおゆき）

授業で宗教の話をしていると、学生の皆さんから「霊やお化けはいるのか」「あの世は実在するのか」「生まれ変わりはあるのか」といった質問を受けることがあります。そもそも、人間は死んだ後どうなるのかというのは、人類が長く考え続けてきた疑問です。こうした質問に、「霊魂なんて存在しない」「人は死んだら無に帰る」「遺体はゴミと同じだ」と否定してしまうのは簡単ですし、そのように考えている部分もあるのですが、これでは生命というものの持つ不可思議さや、それへの畏敬の念をも否定することに繋がりかねず、未だにどう答えるのが良いのか考えあぐねています。

過去の人々はこうした疑問に対する思索を重ね、その結果として多くの宗教が生まれました。宗教は死後の世界についての答えを用意するものとして重要な役割を果たし続けてきましたし、現在でも世界の多くの人々に救いをもたらしています。しかし、科学知識の発達や合理主義の浸透により、こうした伝統宗教対する信頼度は大きく弱まり、殊に日本では大部分の人がこれを信じることができなくなってしまっています。

また、霊魂観や他界観というものが人間の思索によって生み出されたものである以上絶対的なものではなく、時代や社会の要請によってその姿を変える相対的なものであるという事実も重要だと思われます。例えば、仏教の祖である釈迦自身は死後の世界の有無を聞いてきた弟子に対して、考えてもわからないことは答えない「無記」という態度をとったと伝えられています。しかし、釈迦の死後に仏教が多くの人々に広まる中で、人々の疑問や要望に応えるために、地獄や極楽といった教義が整えられて行きました。死後の世界に対する問いは、人類にとっての根源的な疑問であるが故に、子どもたちから親や教師に向かってしばしば投げかけられるものでもあります。その時皆さんならどう答えるか、是非一度自身で考えてみて下さい。

学生の顔から先生の顔へ

人間開発学部教授　坂本（さかもと）　正徳（まさのり）

学生のみなさんのことを見ていたら、顔つきが変わってきたなぁ、と思うときがあります。自分自身で自覚することはあるでしょうか。1年生の頃は、「小学校の先生になりたい」とは言っているものの、新しい大学生活に慣れず、高校生の雰囲気が抜けず、将来のことはまだ先のことのようです。話していることは友人や恋人のこと、サークルなどについての話題が多く、大学生活を謳歌することに努めています。ほんとに先生になれるのかなぁ、大丈夫かなぁ、と不安になりますが、それは毎年、杞憂に終わります。

2年生から教職関係の授業が増えてくるだけでなく、教育インターンシップ、ボランティアなどで子どもたちと触れ合うことが多くなります。知識と実践が相まって、年に一度の「共育フェスティバル」では、一日で雰囲気が変わる学生がいます。子どもたちを見送るときの顔は、一緒に遊ぶお兄さんお姉さんではありません。子どもたちを導く存在、としての意識を内に持った表情をしています。そのとき、学生は自分のことを見つめ直し始めています。子どもたちにしてあげられることを知り、自分の振る舞い方を知り、それらの限界を知ります。そこで真剣に考え、自分の能力を伸ばそうと努力をするのです。それを強要したことはありません。自ずと「できるようになりたい」という言葉を発しているのです。

そして3年生。教育実習では先生と呼ばれて過ごす日々。自分のことを頼ってくれる子どもたちを前にします。普段の学生の顔ではなく、自然と先生の顔になります。慣れない立場に戸惑いは隠しきれていませんが、責任感や充実感を見て取ることができます。

実習中は芽が出る前の種の状態かもしれません。しかしこのような顔つきの変化を目の当たりにさせてくれるからこそ、この先きっときれいな花が咲く、ということを確信させてくれます。安心して「いってらっしゃい」と言えます。

教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

教　育　実　習

学ぶということ

子ども支援学科　教授　野本（のもと）　茂夫（しげお）

教育実習の学びは、実践の中での学びであり、座学中心の学内での学びと学びの質が異なる。本学部では、学内の学びと実践の学びを往還する学び方を大切にしている。この往還的学びを通して理論と実践を統合した深い学びが学生の中に育まれていくことを期待している。

林竹二は、著書「学ぶということ」(国土社)の中で、「学んだことの証は、たった一つで、何かがかわることである」と述べている。実習体験は、学生が自分の中で何かがかわることを実感できる貴重な機会になっている。

教育実習を終えた学生は、学びに厚みが加わってくるように思う。事後指導である「教育実習の振り返り」の会で、幼稚園での責任実習をそつ無くこなすことができ失敗なく終えたということを悩んでいる学生がいた。その学生は責任実習を終えてから「子ども達が本当に楽しいと思える活動ではなかったというモヤモヤ感に苛まれ、失敗のない失敗を経験した」という。「上手くやろうと思いすぎた結果、子どもの気持ちを第一に考えることができなかった。保育に上手くやるなどという概念は存在しない。私はそこから間違えていた」と実習体験を振り返り反省していた。しかし、「保育の中での失敗や難しさの壁にぶち当たった経験を糧に、保育者としての自分を磨いていく」と力強く新たな学びに向かって進んでいた。そこには、保育の現場で子どもと共に学び育った学生の姿が見える。

この実習生の言葉には、学んだ証が滲み出ている。おそらく実習を終えた学生一人ひとりが学んだ証を実感しているだろう。そこで、幼稚園教育実習では、学生がその学んだ証を持ち寄り、実習を振り返って対話する事後指導を実施している。学生それぞれが異なる体験と学びをし、各々の教育実習を振り返り対話をする。この振り返りの対話を通して、学びと学びが響き合い磨かれより鮮明に学生の心に踏み込む深い学びになっていく。その時の夢中で表現し対話する学生の姿には、一人だけの学びで終わらない「学ぶということ」を共有し探究する楽しさと喜びが溢れている。

保育者の役割と私の目指す保育者像

子ども支援学科　３年　渋谷（しぶや）　旭香（あさか）

私が今回実習させていただいたＫ幼稚園では、子どもが1日を通してやりたいことを選択して過ごす、遊びを中心とする保育を行っています。最初にあるエピソードを紹介します。

折り紙で折ったイルカで、家族ごっこをする“イルカごっこ”を女の子数人でやっていた時のことです。イルカごっこも3日目で、そろそろ遊びが停滞してきたところへ、担任の先生が青色や水色のビニール袋を持って様子を見に来ました。先生が持っているものを見ると、子ども達は一斉にこうしよう、ああしようと素材や道具を使い、イルカの家のイメージを膨らませはじめました。ベッドやキッチンなど人間が住むような家だったイルカの家は、イルカが住む、海の中のように変化していきました。その過程でイメージの違いからぶつかることもありますが、お互いの思いを伝え合いつつ、試行錯誤しながらイルカの家作りをします。

私はこの場面で遊びにおける子どもの主体性の大切さや、そのための保育者の援助の重要性に気づきました。

まず子どもがイルカごっこの家を海の中のようにしようと遊びを拡げる姿、自分なりの言葉でお互いに思いを伝え合おうとする姿からは、子どもの主体的に環境へ関わる様子が見られました。この主体的に環境へ関わることが子どもの学びにつながっていくのだと思います。そして、子どもの遊びの中での主体性を引き出すためには、保育者側が意図を持って遊びを提供したり、援助したりすることも必要です。今回は先生が道具・素材を持ってくることや、それぞれの子どもの思いを橋渡しすることが子どもの遊びの援助となっていました。こうした援助のように、子どもが自ら「やりたい！」と思えるような環境構成や言葉かけをすることが、子どもの主体的な遊びを支えることに繋がるのだと思います。

このイルカごっこのエピソードをはじめとして実習中、保育に関わり多くのことを学びました。私は今後この経験を踏まえて、遊びを援助したり、提供したりする力を磨き、子どもの遊びの中での育ちを支えられる保育者を目指したいと思います。

教育実践総合センター夏季教育講座

８月４日(土)特別支援教育実践フォーラムを行いました

特別支援教育の今日的課題

人間開発学部教授　髙橋（たかはし）　幸子（さちこ）

去る８月４日、教育実践総合センター主催第10回夏季教育講座が「今の特別支援教育の今日的課題～一人一人の願いを実現する教育を目指して～」をテーマに開催されました。今回のフォーラムは、人間開発学部10周年記念事業として位置づけられるとともに、本学部の特別支援学校教員養成課程開設を披露する記念すべき催しとなりました。

第１部の講演では、「発達障害当事者と考える理解と支援」をテーマに、発達障害当事者であるＡさんと東京学芸大学の髙橋智先生によるトークセッションが繰り広げられました。Ａさんは、自らの振り返りとお母様や恩師への聞き取りをもとに、生い立ちから今日に至るまで、その時々のエピソードや思いを淡々と語ってくれました。髙橋先生がポイントポイントで専門的な解説を加え、「安心があっての失敗経験の大切さ」や「自己理解の重要性」など、発達障害者の支援において配慮すべきことなどの理解が深まりました。

第２部は、三つの分科会に分かれて、ワークショップを行いました。

第１分科会は、「子どものいごこち・保護者のいごこち・みんなのいごこち」と題して、幼児期の支援において大切にすべきことを酒井幸子先生、中野圭子先生と一緒に考えました。現場経験豊かなお二人の先生から語られるエピソードに幼児の変容の姿を生き生きと目に浮かべたひとときでした。

第２分科会は、「地域の学校における特別支援教育の現在」をテーマに、横浜市の小学校長として、「一人一人を大切にする学校づくり」に取り組んでいらした福岡いつみ先生、大塚ちあり先生、尾上伸一先生から具体的な事例と学校の取組について語っていただきました。めざすべき「共生社会」はそう遠いものではないと確信しました。

第３分科会には、卒業生で特別支援学校に勤務している田尻若奈先生が、ご自身の実践をわかりやすく語ってくれました。田尻先生の報告を受けて、特別支援学校校長の佐塚丈彦先生が、「特別支援学校教員に求められる知識とスキル」について熱く語ってくださいました。特別支援学校教員を目指す受講生にとって貴重な学びの機会となりました。

10周年にふさわしくすでに教職に就いている卒業生が37名参加し、この分野への関心とニーズの高さに改めて気づくとともに、10年の歩みをひしひしと感じたフォーラムでした。

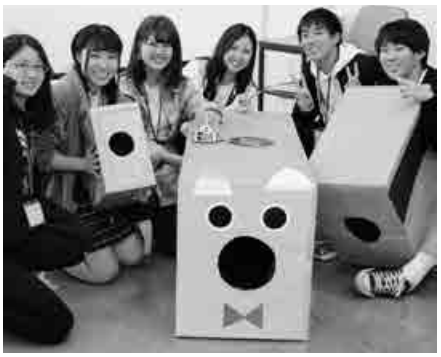
共育フェスティバル　10月28日（日）に開催されました

開場時刻が近づくと、受付の前には行列ができはじめました。「楽しみだね」「何をしようかな」と子どもたちの声が聞こえてきます。保護者の方と一緒に並ぶ子どもたちの顔は、期待に満ち溢れ、わくわく感でいっぱいのようです。

平成30年10月28日（日）、10回目の大きな節目となる人間開発学部「共育フェスティバル」が開催されました。今年度のテーマは、『「結」～人を結ぶ・心をつなぐ～』です。学生企画委員を中心に多くの学生が力を合わせ、初等教育学科、健康体育学科、子ども支援学科などでの学びの成果を生かした活動を企画し、フェスティバルを彩りました。

それぞれの会場では、熱心に作品を創る子どもたち、何度も何度も繰り返し遊ぶ子どもたち、びっくりしたような表情をして鑑賞する子どもたちの姿でいっぱいになりました。そんな一人一人の子どもの周りには、にこやかな笑顔で子どもたちの活動を支え、見守る國學院大學の学生の姿がありました。

当日は、1300名を超える多くの参加者でたまプラーザキャンパスは賑わいました。人間開発学部が地域と一体となることのできた一日でもありました。



國學院大學人間開発学部教育実践総合センター
〒225-0003　横浜市青葉区新石川3-22-1
電話：045-904-7711　fax：045-904-7709